

世界展開力強化事業 ブラジル長期留学 第二回報告書

国際食料情報学部 国際バイオビジネス学科 3年 川村 怜

1. はじめに

ブラジルに来てから4ヶ月が経った。道に迷い帰路に1時間かけたことも、また大学内で迷子になり見知らぬ人に助けられたことも既に懐かしい思い出だ。

今は5ヶ月間に及んだ学期を終え、長期休暇にある。

授業は週に1度で、それも体調不良や先生の事情、祝日などにより出席したのは全6回だった。

その為目標であった大学生活に留まることなく外で見聞を広めることは満身に達成できた。

とは言えはじめは寮と図書館の往復の日々で行き場を失っていた頃もあった。

そんな時は立ち止まり、もう一度自分は何をしに来たのかを問うことで改められた。

前回の構成は学校生活と普段の生活に分けていたが、今回はこれまでの活動報告という形で主たるものだけを書き綴ってゆきたい。

2. 活動報告

・ヤクルト牧場視察

住まいから東に140kmのブラガンサにあるヤクルト牧場で二泊三日過ごした。

この牧場の驚くべきは、ヤクルトの原料のための乳牛だけでなく和牛を育てていることだ。

1990年代に米国から最初の生体が持ち込まれ、現在ではいくつか牧場はあるが、他種と交雑のない純粋な和牛はここだけだと言う。

厳密に言うと和牛の定義に「日本国内で出生し生育されたもの」とあるため和牛とは言えない(よってWagyuと表示される)のだが、無論味は和牛そのものでとても美味しかった。

ヤクルト和牛は月に7頭程度しか卸されない貴重なもので、販売先は契約したブラジルの高級日本食料理店のみらしい。

ブラジルでは分厚い赤身肉が主流で薄い霜降り肉は食べられない。

今後のマーケティングの進展を願うと共に、改めてこの国の日系社会の強さを感じた。



Wagyu

・シュタイナー学校でのイベント

住まいから南東に 170 キロイタペセリカ・ダ・セーハという市がある。

ここには、行政サービスが届きにくいファベイラと言われる貧困層集落がある。

「ファベイラはとても危険だから絶対に近付かないように」と普段から言われてきたので、まさか行くことになるとは思わなかった。

途中車内から見た町は、薄汚く、道行く人の目が鋭く見えた。なるべく目を合わせないようにした。ファベイラの中にも小さな店があるのは意外だった。

そんな中にあるシュタイナー学校で世界のお祭りが開催され、私は日本のブースをお手伝いすることになった。

シュタイナー学校とは、オーストリアの哲学者ルドルフ・シュタイナーによって提唱された教育を実践している学校である。日本にも 7 校以上存在する。

学内は子供たちが走り回り、実に平和でここがファベイラの中であることを忘れさせた。

私たちは餅つきや折り紙、習字などを出した。

インディオの方々も来ていて、ひとりの女の子と仲良くなりお別れに付けていたネックレスを貰った。

彼らの醸し出す雰囲気は独特であった。少年は煙草を燻らしていた。

これが初めてのインディオとのコンタクトであった。



はじめてのインディオ

・栗農家訪問

住まいから東に 130 キロ、アチバイアという町がある。そこで日系 1 世と 2 世の夫婦の栗農家を伺った。農園は急な斜面を利用していた。

奥様は周辺の農家を調査して、手のかかる時期が集中していることから栗に、それに最も適していることからこの地に決めたいらしい。

会食ではたくさんの日系 1 世の方にお会いした。花卉をされている方が多かった。



栗農園

・寮の OG シュラスコパーティーとクリスマスパーティー

近くの家を借り、一泊二日で寮の OG が集まるシュラスコパーティーをした。昼から深夜までぶっ通しで食べ、飲み、騒ぎ、ブラジル人には叶わないと思った。

彼女らはどんなに遅くなくても朝 8 時からの授業を休む事はない。

はじめは授業に対する意識の差かと思ったが、その日踊り続ける彼女らを見て、それは血の違いだと確信した。

しかし、嫌だ嫌だと言いながらも結局一人残らず(雇われたお酒を作る人も)プールに落とされたり、先輩が立て膝を付いたら後輩は這いそれより低くあろうとするなど日本でもありそうな文化も感じられた。

仮眠を取りながらも我を捨て混じった。

寮でクリスマスパーティーも開催された。

夕方から皆でご馳走を作り、食べ、プレゼント交換をするという流れだった。

私は「お金をかけずに心を込めた何かあなたらしいもの」という難題を与えられ、悩んだ挙げ句習字で漢字の名前を書くことにした。

漢字はタトゥーやちょっとオシャレな文具に時折見られ、ブラジル人にとってスタイリッシュに映ると考えたからだ。

渡すまで自信は無かったが、自分の名前という点が受けかなり喜んでくれた。



OG とのシュラスコ



クリスマスパーティー

・インディオ集落訪問

住まいから南東に 200 キロ、長距離バスと電車とローカルバスを 2 本乗り継ぎバハーゲンという所を訪れた。

目的はインディオの集落を訪問すること。初めて交流したときに魅せられこの運びとなった。

集落は囲まれていて、部外者による森林伐採を制限するなどして政府が守っていた。

ブラジル人は相手に親密な態度をとるに対し、彼らは一定の距離を保つ。顔立ちからもアジア人的な性格を感じた。

公用語はグアラニー語で、聞くまではポルトガル語と似ているだろうと思っていたが、大きな間違いだった。しかし、彼らはポルトガル語も話せるので問題はなかった。

集落には学校があり、ひとつ社会が成り立っていた。更には Wi-Fi が通っていて、原始的な生活とは裏腹にスマートフォンを使っているのはなんとも異様な光景であった。

仕事は女性は手工芸品を町で売ること、男性は畑仕事や森林を開拓することだと言ったが、見るからに豊かなのでお金の出所が気になった。

別の人から聞くところによると、どうやら国が手厚く保護しているらしい。思えばインディオはバスも当然のように無賃で乗っていて、ブラジル全体が彼らを守っていることが分かった。

また、彼らは自分の家や祈りの部屋(毎日 5 時間自然の神さまへ祈る)を案内してくれた。

祈りの部屋は毎週薬と祈りに詳しい人が来て、病院のような役割を果たす。

病気にかかっても、毒蛇に噛まれても基本的に自然のもので治癒するらしい。

写真に収めたい所がたくさんあったが、その神秘的な雰囲気からダメだと悟った。

夜遅くなってしまい、その日にはじめて偶然お会いした日系の方のご厚意で泊めさせて頂いた。

日系のコミュニティの温かさにはいつも助けられている。

移民の国であるブラジルでどうして日系だけがこんなにも強いコミュニティ築いているのか考えたが、それは開拓時代にあると思った。



インディオの家

- 去年お世話になった農家さんを訪問

今は住まいから北東に 220 キロ、州をまたぎミナスジェライス州のポウゾ・アレグレにというところにいる。

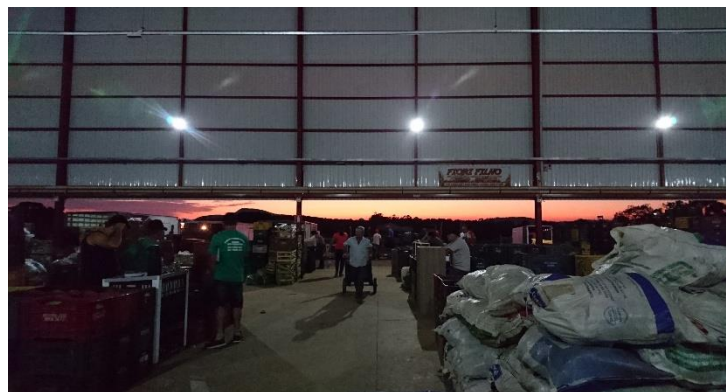
ここには去年学科の農業実習で約 1 ヶ月勉強させて頂いた農家さんがある。

1,300ha の土地に大豆、トウモロコシ、フェイジョン豆、トマト、じゃがいも、人参、葉野菜などを育てる大農家だ。

去年とは違い、従業員と会話が出来るようになったので経営者からは聞けない話も聞けるようになった。なにより作業をしていて、皆が何を話しているのか分かるようになったのが嬉しい。

去年とは別人ねと従業員は言う。応答に仕方なく日本語で返していた日々を懐かしく思う。

ここでクリスマスを過ごし、新年は別の昨年お世話になったお宅で迎える予定だ。



市場で迎えた日の出

3. 終わりに

これまでの活動で農家、サラリーマン、駐在員、JICA の正社員及びボランティア、起業家などたくさんの方と出会って来た。

皆それぞれの価値観のもとそれぞれの人生を歩んでいる。だからこそ自分の人生に誇りを持っていて、辛い経験があっても明るかった。

私も彼らのようなパワー溢れる人生を歩みたくて、彼らになろうとした。たくさん
の価値観に揉まれ見失った。

が、とある日ひとつ通じているのは、自分の良いと思うところに誠実に向かい、その時のベストを尽くしていることだと気付いた。

この4ヶ月で一番の変化は利他的でいたいと思うようになったことだ。

異国の地で人に助けられてきたからか、さまざまな人と出会い交流してきたからか、ここに書くまでもないひよんな事がきっかけでその大切さや強さを知り、そう思うようになった。

これまで私はこのまま卒業して社会人になることに心底からは納得していなかった。と言うか、当然の流れであって深く考える事でもないように感じた。出来ることなら永遠に学生でいたかったし、働くということ、その本質を知らなかった。

今なら分かる。学生の中に気付けて良かったと思う。

さらば、社会的な人間になるために今私に出来ることは何か。

今後は目の前の物事に誠実に取り組んでいきたい。そして誘われたから、ではなく自らの興味のもと自ずから進んでいきたい。

更に、身に気を付けて一人旅をしたいと思う。

ブラジルの国土は日本の23倍で各地に名所がある。是非幾つか訪れ見聞を広めたい。学業より学問を鍛えたい。

また、この遠く離れた地で留学ができること、大学及びOBの方々、家族、友人などたくさんの方々への感謝を忘れずにいきたい。